令和３年２月10日発行　通巻216号

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

神奈川県立歴史博物館だより No.3

FEB. 2021 Vol.26

錦絵にみる明治時代　―丹波コレクションが語る近代ニッポン―… 2
特別陳列「出土文字資料からみる古代の神奈川」によせて…… 6
THE　けんぱく　PUNCH　図書資料の修復② …… 8

欧州管絃楽合奏之図（部分）　周延

錦絵にみる明治時代　―丹波コレクションが語る近代ニッポン―

桑山　童奈

はじめに

令和３年度の幕開けに、当館の浮世絵丹波コレクションから明治時代に出版された錦絵を紹介する展覧会を開催する予定です。「浮世絵って江戸時代のものでしょう？」と思う人がいるかもしれません。プロデューサーである版元が絵師に絵を描かせ、彫師と摺師が分業して生産する浮世絵の出版は明治時代も続きました。

浮世絵ファンの方なら明治時代の浮世絵師として月岡芳年、小林清親の作品を知っていると思います。しかし、この展覧会では明治時代の錦絵の名品とされる作品群ではなく、時代を写し、伝える役割を果たした浮世絵に注目したいと思います。

明治時代は幕藩体制の江戸時代から大きく変わった時代です。将軍に替わり天皇が国家の元首となり、憲法を持って議会で政治を行う社会となりました。また東京と名前の変わった町には洋風建築が建ち、人々は洋服を着るようになるなど身近な生活も大きく変わりました。このような変化やできごとを浮世絵師たちは描き、時に建造物や人物に名前を書き添えて紹介し、新たなモノやできごとの情報を人々に伝えようとしました。一枚の錦絵から、盛りだくさんの情報を見てとることができます。

この展覧会では時代を生き生きと描いた約 260 点の錦絵で明治の事件、世相などを見ます。本稿では出品予定の錦絵を見ながら展覧会の楽しみ方をご紹介します。なお、現在は一般的に浮世絵という言葉が使われることが多いですが、本展では多色摺り木版画の情報媒体的な作品だけを紹介するので、「多色摺り木版画」の通称である「錦絵」の語を用います。

1　社会を映す―できごとを伝える

明治の錦絵は、博覧会などのイベント、政治的なできごと、天皇の動向など時事的なできごとを直接的に伝えます。江戸時代は幕府に関わることを直接的に表現することはできませんでした。そのため、この展覧会でも紹介する文久３（1863）年に十四代将軍徳川家茂が公武合体のために上洛した大事件を取り上げた錦絵では家茂は誰と特定できない大名や鎌倉幕府の将軍源頼朝の姿に置き換えられて描かれました。しかし明治になると反政府的な不平士族の内乱も直接的に描かれるようになります。

多くの錦絵が出版されたできごとは、人々の注目を集めた事件といえます。丹波コレクションの明治の錦絵の中にも、最後、かつ最大の内戦であった西南戦争（明治 10〈1877〉年）、内国勧業博覧会（第二回明治 14〈1881〉年、第三回明治 23〈1890〉年）、大日本帝国憲法発布（明治 22〈1889〉年）、日清戦争（明治 27〈1894〉～ 28〈1895〉年）は数多く収められています。

錦絵にはさまざまな事件が描かれましたが、全てが

【図 1】周延　憲法発布式之図

誠実な取材に基づいて正確な情報を描いているとは言えません。ここでは取材したと思われる例と事実ではない情景が描かれた例をご紹介します。

まず、報道を参考にしたと思われる例は、明治22（1889）年２月の大日本帝国憲法発布式の様子を描いた、楊洲周延（ちかのぶ）「憲法発布式之図」【図１、明治22（1889）年刊】です。この絵は明治宮殿で天皇が内閣総理大臣黒田清隆に憲法を授ける情景を描いています。黄色い短冊に人々の役職名などが記されていますが、天皇を始めとする人々の立ち位置は『官報』明治22（1889）年２月３日に掲載された「正殿式場ノ図」と殆ど一致します。この図は新聞にも掲載されたので、周延が参考にした可能性があります。

一方、事実ではない情景を描いた例は五代歌川国政「魯国皇太子御着之図」【図２、明治24（1891）年刊】です。鉄道の東京の玄関である新橋駅にロシアの皇太子（後の皇帝、ニコライ２世）が到着し、日本人たちが楽隊の演奏とともに出迎える様子を描いています。明治24（1891）年４～５月にロシアの皇太子が来日したのは事実ですが、滋賀県大津で切りつけられて怪我をした（大津事件）ために、東京を訪れることはありませんでした。したがって、この絵は想像によるものです。しかし、大津事件を知らない後世の人であれば、実際にあったできごとと誤解してしまいそうな絵です。

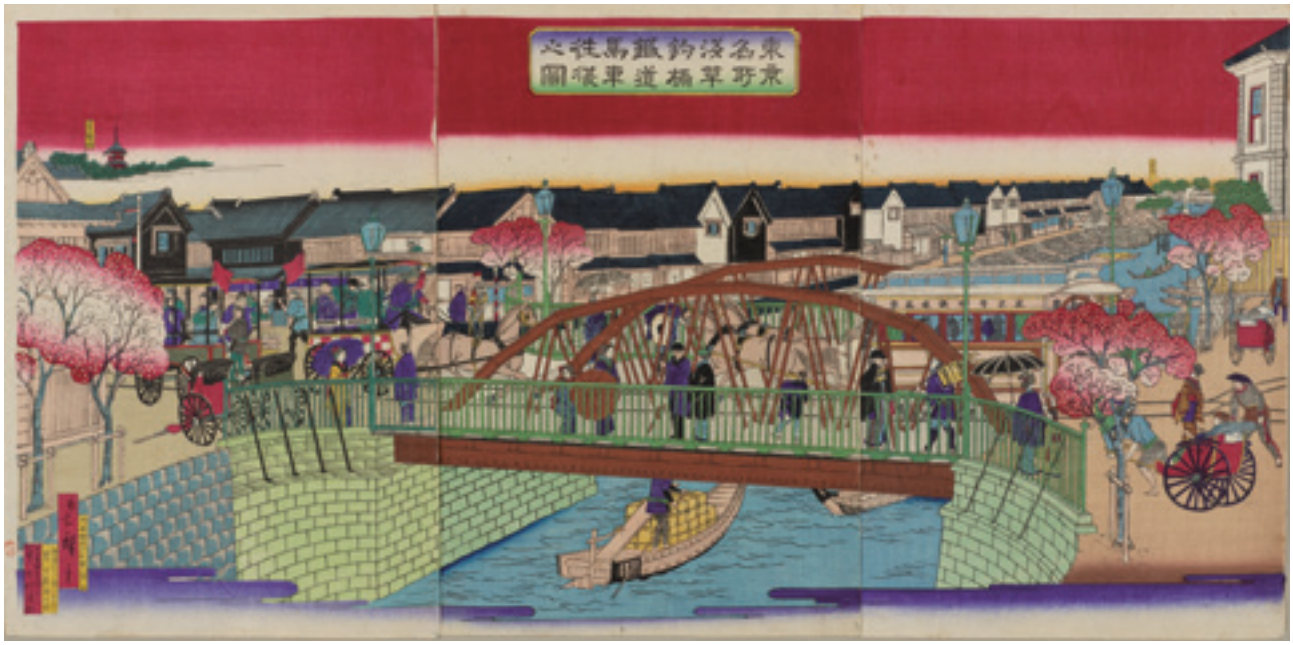
当時の人々も錦絵に描かれていることが全て真実とは思っていなかったでしょう。天皇（かあるいは皇族）とロシア皇太子が万国旗の下に対面する情景は、人々の期待を反映したものでしょう。人々は「絵空事」もあると理解の上で楽しんでいたと思われます。

【図２】五代国政　魯国皇太子御着之図

2　文明開化を伝える－西洋文明の導入

幕末、安政６（1859）年の横浜開港以降、日本人は西洋の文明を受け入れ、町や生活が近代化します。江戸から東京へと改称された町には慶応4/明治元（1868）年に完成した築地ホテルを皮切りに洋風の建築物が見られるようになり、第一国立銀行（明治５〈1872〉年竣工）、銀座煉瓦街や明治５（1872）年に開業した新橋（東京）横浜間の鉄道は多くの錦絵に描かれました。新しい建造物や文明開化の風俗を描いた錦絵を「開化絵」と呼びますが、ここでは建造物を描いた錦絵を見てみましょう。

江戸の町にあった橋は初代歌川広重らの名所絵にしばしば描かれましたが、明治になるとそれらは馬車が通ることができるような西洋風の橋に架け替えられていきます。三代歌川広重「東京名所浅草釣橋鉄道馬車往復之図」【図３、明治17（1884）年刊】は明治17（1884）年にボーストリングトラス型の鉄橋に架け替えられた浅草橋（東京都台東区・中央区）を大きく描きます。神田川に架かる橋の上には明治15（1882）



【図３】三代広重　東京名所浅草釣橋鉄道馬車往復之図

年に開業した「東京市街鉄道馬車」と書かれている鉄道馬車とその線路、左上には浅草寺が見えます。

この絵で注目したいのは空の色です。目にも鮮やかに空を染め上げた赤い色はこの絵だけでなく「開化絵」の空の表現によく使われ、明治の錦絵の特徴ともいわれる色です。赤い空の色が画面で強く主張する「開化絵」は、後世の浮世絵愛好家たちには「赤絵」とも呼ばれて芸術的でないと不評でした。しかし、さまざまな東京の新しい建造物は真っ赤な空の下の風景として描かれて、数多く出版されており、明治のある時期の人々がこの色を喜んで受け入れていたことは間違いないでしょう。

3　開化の風俗－衣服と髪型の西洋化

江戸時代は髷を結い、着物を着ていた日本人も次第に洋服を着る人が多くなっていきました。明治の錦絵を時系列で見てみると、服装の変化を見てとることができます。

明治 16（1883）年、東京に国内外の貴賓が集う社交場、鹿鳴館が開館しました。表紙にも使った楊洲周延「欧州管絃楽合奏之図」【図 4、明治 22（1889）年刊】は鹿鳴館で実際に行われた演奏会の様子を描いたという説があります。

シャンデリアの灯りの下、現代の私たちにはお馴染みですが、江戸時代にはなかったピアノやバイオリンを始めとする楽器と合唱による演奏が行われています。左上には小学唱歌「岩間の清水」の歌詞と楽譜が記されています。髪の色から日本人と思われる女性たちは腰当をつけた裾の長いバッスルスタイルのスカートをまとい、室内装飾もいかにも西洋風であるなど、明治の新しい風俗ばかりが描かれています。

着物を着た女性が三味線を弾いている江戸の浮世絵と本図では、まるで別物という印象を受けるのではないでしょうか。日本人の生活は急激に西洋化していったことが見てとれます。

4　明治の肖像画

明治の錦絵には天皇や新政府で活躍する人々を集合写真風に描いたものがあります。小林清親「皇国貴顕（きけん）肖像」【図 5、明治 16（1883）年刊】は天皇・皇后とトップクラスの政治家たちが描かれ、名前も記されています。よく見ると一人ひとりの髪型や髭のかたちに個性があらわされているように見えます。

ここでは岩倉具視（文政 8〈1825〉- 明治 16〈1883〉年）を『近世名士写真』其 1（近世名士写真頒布会 昭和 10〈1935〉年刊）【図 6】の肖像と比べてみましょう。顔の向きは逆ですが、オールバックの髪型と生え際、逆ハの字形の眉、一文字に結ばれた口元などが似て見えます。清親は似顔絵として描こうとしたと言って良いのではないでしょうか。

明治 4（1871）年の断髪令を経て短くなった男性の髪型と髭は個性をあらわしやすく、似顔絵を描く際の大事なポイントとなったように思われます。清親は岩倉を「貴顕」らしく凛々しい姿で描くことを主旨としながらも、顔のしわを誇張しているように見えます。江戸時代、男性で似顔絵が描かれたのは歌舞伎役者たちでした。明治の人々の政治への関心は政治家たちの似顔絵を求めたのでしょう。写真が簡単に撮れる現代でも新聞や雑誌には政治家が似顔絵で描かれることがあります。それは似顔絵ならではの面白みを表現できるからでしょう。

【図 4】周延　欧州管絃楽合奏之図

【図 5】清親　皇国貴顕肖像（右上：岩倉具視部分拡大）▲
【図 6】国立国会図書館電子展示会『近代日本人の肖像』より転載▶

5　丹波コレクションの「明治歴史絵」

最後に本展でご覧いただく錦絵の大部分を収集した丹波恒夫氏とそのコレクションについてご紹介します。現在は当館が所蔵している浮世絵コレクション「丹波コレクション」を築いた丹波氏は明治 14（1881）年、山形県に生まれました。初代広重、横浜浮世絵のコレクターとして知られていますが、近代日本を造った人々への敬意から明治の錦絵も数多く収集し、「明治歴史絵」と呼びました。氏は昭和 41（1966）年に刊行した『錦絵にみる明治天皇と明治時代』（朝日新聞社）の序文で「ともすれば忘れられている明治建設新時代を、これ等の錦絵でその一部でもお目にかけたいためである。」とその刊行の主旨を記しています。

丹波コレクションが当館の収蔵品となってからは、平成 13（2001）年に明治天皇の姿を描いた絵画を集めた特別展「王家の肖像－明治皇室アルバムの始まり－」で一部を紹介しましたが、例えば西南戦争、憲法発布など「明治歴史絵」コレクションの全体像を紹介する展覧会ははじめてです。

丹波氏は昭和 46（1971）年に亡くなりましたが、令和 3（2021）年の今､明治はさらに遠くなりました。この展覧会では丹波氏の志を継ぎ、日本の近代のはじまりを錦絵で辿るという意図もあります。

おわりに

以上、実際に展示予定の作品を見ながら明治の錦絵についてご紹介しました。これまで明治の錦絵が展覧会で特集される機会は多くはありませんでした。しかし、学校の歴史の教科書や資料集ではしばしば掲載されていて、その記憶がある人は多いでしょう。本展では学校で学んだ明治日本の歴史を錦絵＝ビジュアルでお楽しみいただければと思います。前述したように錦絵は事実を正確に描いている訳ではありません。想像や脚色、誇張は当たり前です。それらも含めて錦絵は明治という時代を写し、後世の私たちが近代日本のはじまりを理解するために役立つものといえます。

また、冒頭にも述べたように、明治の浮世絵師として月岡芳年、小林清親、豊原国周、楊洲周延、三代歌川広重などは名前が知られていますが、彼ら以外にも数多くの浮世絵師がいました。今では忘れられた浮世絵師たちも著名な絵師に劣ることなくこの時代を活写しています。この展覧会ではできるだけ多くの浮世絵師の作品を紹介し、明治の錦絵の世界を広くご覧いただきます。

この展覧会で最後に出版された作品は明治天皇の大喪（明治 45〈1912〉年）を描いたものです。既に石版画などの新しい媒体に押され、日清戦争を最後の活況として錦絵の出版数は減ったため、丹波コレクションでも以後の作品はわずかです。明治ニッポンのあゆみを色鮮やかな錦絵で感じていただければ幸いです。

（くわやま どな・主任学芸員）

2021 年度開催予定特別展

錦絵にみる明治時代

－丹波コレクションが語る近代ニッポン－

会期：2021 年 4 月 29 日 (木・祝) ～ 6 月 20 日 (日)
【前期】4 月 29 日 (木・祝) ～ 5 月 23 日 (日)
【後期】5 月 26 日 (水) ～ 6 月 20 日 (日)
休館日：毎週月曜日（ただし 5 月 3 日 (月・祝) は開館)、
※ 5 月 25 日 (火) は特別展のみ閉場
会期中の前後期で全ての作品の展示替を行います。

特別陳列「出土文字資料からみる古代の神奈川」によせて

望月　一樹

地中から見つかる文字資料

かつては「もっかん」というと、多くの人が木製の棺、すなわち「木棺」をイメージしました。それが「木簡」として広く知られるようになったのは、昭和61（1986）年に奈良県の平城宮跡に隣接する場所（平城京左京三条二坊）で商業施設建設に伴う発掘調査により約3万4,000点にのぼる木簡が見つかり、さらにその北側を通る二条大路跡からもそれを上回る約7万5,000点もの木簡が出土したのが大きな契機でした。特に出土した木簡のなかに「長屋親王宮」と記されたものがあり、この場所が奈良時代の悲劇の宰相ともいわれた長屋王の邸宅跡であることが分かり、当時の新聞各紙にも大きく取り上げられました。この大量木簡の発見により、歴史資料としての木簡の存在を誰もが知るようになったといえるでしょう。

わが国の古代史研究は、『日本書紀』をはじめとする六国史や律令格式に関する法令集、また正倉院文書に代表されるように社寺に残されてきた古文書など、数少ない文献史料で進められてきました。ところがここ20年ほどは、全国の遺跡から木簡や墨書土器、漆紙文書といった文字の記された資料が数多く出土したことで、これまで未解明であった古代における地方の様相も次第に明らかにされてきました。古代史研究にとって、考古学による発掘調査によって得られた出土文字資料は、まさに新出の魅力あふれる資料であるといえるでしょう。ある考古学者から古代史研究者は「鰹節に群がる猫」と比喩されたこともありましたが、記された文字だけでなく形態や出土遺跡との関係性も含め、考古学と文献史学が連携して研究を進め、より具体的な当時の地方行政や人々の生活の実態がわかってきました。

さて木簡ですが、現在は出土した木製品に文字が記されていれば、すべて木簡と称しています。例えば中世城郭遺跡などから出土する将棋の駒や聞香札（もんこうふだ）なども、木簡の一種です。古代では、多くは荷物につけられた荷札や付札、また行政上の記録や文書としての木簡が大半を占めています。なお木簡は、正倉院に伝世品として30数点、また戦前に三重県の柚井遺跡で2点などわずかに見つかっていましたが、大きな注目を浴びることはありませんでした。それが戦後の昭和36（1961）年1月に平城宮の発掘調査で41点の木簡が出土したことで、学会においても注目されるようになり、以後木簡研究が進められるようになります。

神奈川県の木簡 －宮久保木簡について－

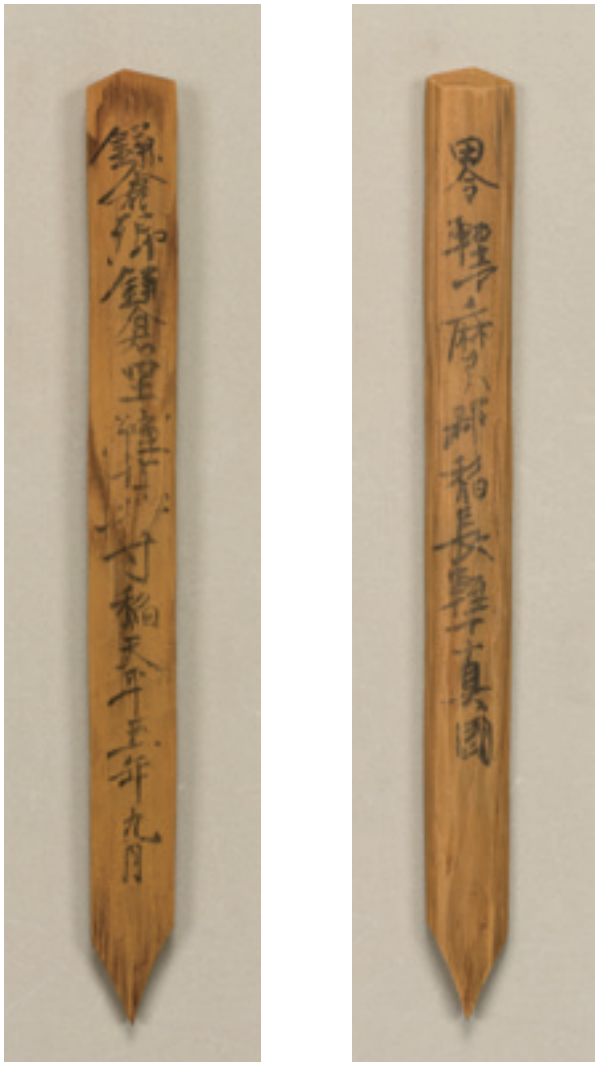
一方で、実は昭和35（1960）年6月に小田原市永塚にあった下曽我遺跡（永塚遺跡、あるいは千代遺跡ともいう）で発掘調査が行われ、県内で木簡が出土していました。本遺跡は、県文化財保護専門委員も務めた赤星直忠氏が戦前に調査を行っており、まず國學院大學の樋口清之氏らによって6月12日から21日に発掘調査が行われ、木簡のほか墨書土器などが出土しました。そしてその調査が終了した翌日の22日から27日まで今度は神奈川県によって周辺が発掘調査され、この際も2点の木簡が発見されました。先に述べたように研究者間で木簡が注目されるようになった平城宮での発見より、実は半年早く、神奈川県内において木簡が発見されていたことは一般にはあまり知られていないのではないでしょうか。

そして今、この下曽我遺跡での木簡出土より約60年が経ちましたが、その間県内各地で発掘調査が行われ、現時点で下曽我遺跡出土分も含め17点の木簡をはじめ、その他数多くの墨書土器が出土し、古代神奈川の様相が次第に明らかにされつつあります。

そこで、ここでは神奈川県内で木簡に関する本格的な研究の契機となった、綾瀬市の宮久保遺跡出土の木簡について取り上げたいと思います。綾瀬市早川で高校建設のために発掘調査が行われた宮久保遺跡ですが、昭和58（1983）年にその遺跡内の井戸跡から1点の木簡が出土しました。先端部が尖り、断面がかまぼこ型の木簡の表裏には、次のように記されていました。

・鎌倉郷鎌倉里軽マ□寸稲天平五年九月　【図1】
・田令軽マ麻呂郡稲長軽マ真國　【図2】

まずこの木簡の性格ですが、表面に「郷＋里」の地名や「稲」と記されていることから、おそらく鎌倉郡家（ぐうけ）において作成され、そして稲に付せられた付札木簡であると考えられます。さらに天平5（733）年9月と年紀が記されています。律令体制下の地方行政単



【図１・2】 綾瀬市 / 宮久保遺跡出土木簡（左表・右裏）
※原品は神奈川県教育委員会蔵

位は、当初は国－郡－里でしたが、霊亀元（715）年に里を郷として郷の下に２～３の里を設置する郷里制がとられます。その後天平 12（740）年に里が廃止され、国－郡－郷となりました。この木簡は、まさに郷里制の期間に制作されたもので、その表記から東国においても法令が遵守され履行されていたことがわかります。ではこの木簡が付けられた「稲」は、どのような性格のものだったのでしょうか。それを知る手掛かりが、裏面に記された「郡稲長（ぐんとうちょう）」です。「郡稲」は、在地に置かれた地方官稲（かんとう）で、天平６（734）年には官稲混合令により正税（しょうぜい）の中に含まれるようになります。この木簡が天平５（733）年であることから、混合される直前の郡稲であったといえるでしょう。さらに郡稲は、出挙（すいこ）（貸し付け）による利息を財源としていたことから、郡稲となる出挙利息の稲に付けられた木簡ではなかったかとも推測されています。その一方で、この木簡のもう一つの課題は、出土した宮久保遺跡の位置が当時の高座郡内に属し、鎌倉郡ではないということです。木簡が作成された鎌倉郡家は、現在鎌倉市御成町の御成小学校内の今小路西遺跡に比定されています。一方の宮久保遺跡は高座郡でもどちらかといえば海老名市に近い丘陵の斜面に位置しています。海老名市には相模国分寺や国分尼寺があることから、付近に相模国府が存在したと考えられていました。そのためこの稲も、鎌倉郡家から国府へ移送される途中、何らかの理由で宮久保遺跡のある場所で廃棄されたのではないかという説が唱えられました。しかし近年の発掘調査で、８世紀段階の国府は大住郡内（現在の平塚市四之宮周辺）に所在したことが明らかにされています。そのため鎌倉郡家から国府に至るルートからは宮久保遺跡の位置は大きく外れてしまい、その移送先について再検討をしなければなりません。そのような中、宮久保遺跡は高座郡の有力な在地豪族で郡司でもあった壬生直（みぶのあたい）氏が管理する倉屋であったのではないか、そしてそこに官稲の一つである郡稲が移送されたとも考えられています。しかし、残念ながら宮久保木簡に関する諸問題はいまだ解決されていません。

おわりに

木簡など出土文字資料は、地域の古代史研究にとって重要な歴史資料ではありますが、記された情報は限られており多くのことを物語ってはくれません。そのような出土文字資料からいかに情報を引出し、地域の歴史を読み解いていくのかは難しい課題ではありますが、逆に興味深く楽しいものです。今後も各地から木簡などが出土することと思いますが、それら出土文字資料から古代の神奈川の新しい様相がより明らかになっていくものと期待するところです。

（もちづき　かずき・学芸部長）

参考文献

・神奈川地域史研究会編 『シンポジウム　宮久保木簡と古代の相模』 有隣堂　1984 年
・鈴木靖民 『相模の古代史』 高志書院　2014 年

特別陳列

出土文字資料からみる古代の神奈川

会期：2021 年２月９日（火）～３月 28 日（日）
休館日:月曜日、２月 12 日（金）、16 日（火）、24 日（水）
※会期は変更する場合があります。
会期中、一部の作品・資料の展示替を行います。

図書資料の修復②

前回の博物館だより 215 号 (8 ページ) では、横浜正金銀行調査部資料としての図書約 1 万 1 千冊の中で、状態が悪く取り扱い困難なものの修復について、当館営業部長パンチの守による取材の模様が掲載されましたが、今回のパンチの守は、修復後のことなども気になるようで…

パンチの守（以下、パ）：ワターシが先日仰天させられた、細かい紙きれだらけの図書はどうなったかのう。

担当職員（以下、担）：あ、営業部長！今ならちょうど途中経過をお見せできますよ。

パ：これがばらばらだったあの図書の一部か？

担:外れてしまったページは、糸綴じをし直すために、まずは糸穴とその周辺、ページのつなぎ部分の破れなどを修復しています。

パ：前回聞いた、強いのに資料にやさしい、和紙と水溶性セルロースエーテルを使っておるのじゃな。必要ならば、水でなぞるとするりと外せて元の状態に戻せるという…

担：すばらしい！営業部長、さすがです！

パ：こ、これは！細かい紙きれであったものが、読めるようになっておるぞ！

担：切れ切れの小紙片となっていたものは、表裏の文字がどちらも読めるように、最も薄く透明度の高い和紙の上で文字を合わせながらつなげました。この後、ページは糸綴じをして一冊にまとめ、背を補強し、表紙を取り付けます。すべて和紙と水溶性セルロースエーテルを使って。

パ：それでようやくできあがりと。

担：その後、この図書の寸法に合わせた保存ケース“秩(チツ)”を、中性紙ボードを使って作製し、ケースに書名や分類番号などを表示してできあがりです。

パ：中性紙ボードとな？

担：図書に使用しているのは主に、厚さ 0.45mm、pH(ペーハー)7.5 ～ 10 の中性厚紙です。

◀中性紙の保存ケース

パ：何故、中性紙を使うのじゃ？

担：戦前期の図書には酸性紙を使用しているものが多く、光や湿気その他により紙の変色や劣化が起こりやすいのです。それに対して中性紙は劣化しにくい。図書ごとに合わせたサイズの中性紙ケースに収めて保管することで、光やほこりを遮断、劣化を遅らせ、摩擦などの刺激から図書を護る役割もしてくれるのです。

パ：破損して手に取ることができないような図書を、修復し読める状態にするだけでなく、未来に残すことも考えられておるということが、よくわかったぞ。ワターシも劣化せぬよう、これからも張り切って様々なものごとを見て回るのじゃ！

（吉澤 智恵子 / よしざわ ちえこ・非常勤資料整理員）

発行：神奈川県立歴史博物館　http://ch.kanagawa-museum.jp/　twitter @kanagawa_museum
〒 231-0006　横浜市中区南仲通 5-60　TEL　045-201-0926　FAX　045-201-7364
発行日：令和 3 年 2 月 10 日　印刷：株式会社 TAKT・JAPAN